

か細き秋雨

鍋屋 寛 明

細い絹糸のその様な雨が、朝から小止みなく降つてゐます。

庭の枯木はしつとりこぬれて、そよこのゆるぎも見せません。

軒をくゞつた瞬間!!

降りかゝつてゐた雨は、私の周圍から離れました。

そうして戸影に立つてぼんやりと。

來りし方を今更に見入れば、地の面にはそのハネが白く波をぬつて、千馬を一面に飛ばしたやうに薄白

く光つてゐます。

室の外からしめやかな雨滴の音が、悲しく私の心を

咬るやうにコトコトと間遠に聞えて來ます。

獨り胸をかいこめば。

泌々と物想ひにふさわしい今日です。

連想の長い縲糸は悲しい事をのみ求めて!!

それが過去へ過去へと曳かれて行きます。

噫呼逝けるその日の

幼けなかつたなつかしみ

それは淡いものでした。

然しそれが今更のやうに深い深い悲しみの思出となつて、このブレストに泌められてゐるので有ります。

私が小僧になる前の事でした、五年も六年も、

小さな可憐な妹は遠い松林のたんとあるお寺様へご連絡して行かれて仕舞つたのです。

美しく白布に包まれた小さい柩が、人々に抱かれて

嚴かに家を出て行く時、私は聲を出すのがそら恐ろ

しく只しくしくと泣きました。

私には妹を連れて行く、それらの人々が恨めしい

程憎らしいと思はれてなりませんでした。

列が靜かに靜かにほの白く光る路を過ぎて行つた後

には、二三人の人より残つて居ませんでした。

母の石蠟のやうに青白く變つたいたゞしい顔!!

永遠の神秘を示すが如きその瞳は、黒水晶に生命を

あたへた如く聖く寂びしき色を漂はして、

花びらもて綴つた様な唇、青白いまで純白な頬こそ

まあその顔は何と言ふ、しかも言ひしれぬ神秘を含

む面影であつたでしやう、

赤い唇も蕾のまゝ、稍の霜に凍つたやうに閉ぢられて

動きも見せず、

それがそのまま、ミイラになつて行くやうにも見えませんでした。父の双の腫、それもやつぱり露に結ばれてゐました。

柩の列がしめやかに

雨を縫ふて

黒き沈黙の人々は私しの家を

幻の如く出でて行く

それは丁度今日のやうな日でした。

列が一廻して見えなくなつた後は、強い〜雨となりました、その時私は母の膝に凭たれて、雨の音に耳を借しながら佛前の灯に腫を輝かしてゐました。然し何故かおのゝいてゐました。

ほんちに私は佛壇の灯が淋しくそら怖わかつたのです。

それでも母が灯をつけ替えて鐘をカーンと一つ鳴らす時は、そのいつまでも〜ひびいてゐる音律に耳を澄すのでした。

するとそれが遠い妹の所へまで聞へて返事が来るやうな感じがしました。

だからいまか〜と待つてゐました。

それは毎日〜鐘をならす度毎、

その時の後姿がウツトリと夢のやうに浮かんで來ました。私はその時はまだ死と言ふものがよく解してゐなかつたのです。

そりや初めて、有つたからです。

このあどけない私を母は見てどんなにか泣いた事でした。

あゝ物語りのヒロインは今宵いづこの空に!!

雨は又一頻り強く降り出して來ました。

こごと〜と間早やに打つ雨垂の高いひゃきが私しの新にこみ上げしかなしみは熱い涙を誘つて止度なく

そうして白紙に型を落しました。

それが二つ三つしみぬきのやうに廣くちりました。見はてぬ夢を追ふごと恍惚と涙さしぐみし腫をはる

か、山亦山を見渡した時餘波をたゝへた鐘の音が夕靄の奥からゴーンと響きわたるのでした。

寂 寥

安息の胸に手をおき

秦 觀 行